

夏季福音特別集会 第3回集会

「御霊の祈り」——ペテロ前書第4章7～14節

2003年8月16日（御殿場YMCA東山荘）

家族全部が集会に参加 神の奥義なるキリスト 田毎の月 真理の御霊 上からのお墨付き キリストの分身 あなたは私と一緒に死んだ キリストと共同の相続人 神の預知予定 神さまのお使い キリストの姿を瞑想しながら祈る

●家族全部が集会に参加

家族全部が集会に参加できるとするのは大きな恵みです。子育て中のお母さん方はなかなかそうもいきません面もありますけれども、お気持ちこそちらに向いておられたら、必ずそれは実ります。

顧みれば、今、小さい子を連れてきてます恵子が生まれましたとき、それはちょうどここで小池先生の夏の福音集会がありました、1967年の8月の末でした。そして、そこへは残念ながら、家内は身重でしたので来れませんでした。集会から帰りまして、一日あいだをおいてその次の9月1日から毎晩——ピリピ書だけを4回にわけて集会なされた——そのピリピ書を毎晩、ひとつずつ二、三人の兄弟方と一緒に祈祷会をして、そのテープを聞いていた。4回が終わって、その明るる日は9月5日ですね、その日、一日なにか身体の状態が変わるく、戸を閉じて、妻はずっと休んでいた。そして、その次の9月6日の未明ぐらいから、何か陣痛のようなものを感じて、そして、京大病院に担ぎこまれて、あつというまに赤ちゃんが生まれてしまった。2か月ほど早い未熟児です。1540グラムという。そして、保育器の中に入って日を過ごす前に、まず問題だったのは、生命がもつかどうかということ。あの恵子が生まれてきたときは、全然肉がついてなくて骨と皮だった。私は先生に聞いたんです、

「これ大丈夫なんでしょうか？」

「わかりません。三日間が勝負です。三日間を生き抜く力が与えられていたら、この子は大丈夫です。けれども、その生命が、力が宿っていないければ、どうしようもありません。それは人の力でできないことですから」

と、そうおっしゃった。

「はい、わかりました」

と。それからまた我々はみんなで祈っていたんです。一生懸命祈っていた。そして、見事に三日を生きぬきました。それから、保育器の中に56日間入ってました。よくぞ失明しなかったと思います。あの頃は、未熟児網膜症というのが昭和41年頃からずっと出てきま



したから。それを私は知らなかった。そして、63日ぶりに退院することになるんですけども。その退院する頃にちょうど、京都の大和屋旅館という所で小池先生の集会があった。「天人」、「イエスの天国」という題だった。

その恵子が今、小さな颯はやくを連れてこうして来ているんです。そして、恵子が生まれた年は家内は出られなかった。それで、私たちがあまりにも、こういう特別集会が素晴らしかったということを言うものですから、すごく寂しかったようなんですね。それで、

「次の鹿沢集会へ何としてでも奥様と恵子ちゃんを連れて行くこうではないか」

と。鹿沢（群馬県吾妻郡）というのものはもの凄く遠い所なんです。上野から列車が出まして、それからまたバスに揺られて行くという大変な所なんです。「行くこう、行くこう」ということになって、おむつの類を全部先に送って、鹿沢の紅葉館という旅館の方には、こういう食事を特別に作ってほしいことをお願いした。そして、新幹線の中もおむつの取り替えもしなければいけませんね。そういうことで、私たちは、

「奥さまを連れて行くこう」

というY子さんのひたむきな思いに動かされて、まあいうならば不可能を可能にして、鹿沢の集会へ行つた。その恵子その後ほとんど病気知らずですくすくと成長しました。鹿沢では、恵子おねえちゃん、小さい方々の面倒をみるんですけれども、旅館の地下にトンネルがありまして、旅館から集会所までは地下道を通ってずっと行くんです。うす暗い所でね、声を出せば響くでしょ。そういう所を通って、恐くて、子どもたちはみんな泣いていた。そして、祈祷会といったら、大声の方々がみんなてんでにワアワア祈りだすから、もう正気の沙汰ではないんです（笑）。それで、恵子が作文を書いた、

「祈祷会に出席しました。あんまりワアワアやかましくて、寝たくても眠ることも

できません」

と（笑）。そしたら、作文の添削で、先生が横にクエスチョンマークをつけた。祈祷会が騒がしすぎてとは、何という祈祷会かと。そういうところをくぐりぬけて——まあ言うならば、あの「われは海の子」の歌詞に、

「潮騒の音を聞いて私は育った。海の水でゆあみをして私はたくましく育った」

というのがありますように——集会漬けで恵子は育ってきた。だから、赤ちゃんを連れて集会へ来るのは当たり前前と思っている。そして、集会のお姉さん方に本当に可愛がられてずっと来ました。

そういうことで、ちょっと長くなりましたけれども、ぜひ、ご結婚なさってお子さまをお持ちになったら、万難を排してとにかく集会に来る。半分も聞けません。聞けませんけれども、来る。そして、交代交代にお子さまの面倒をみるとか、そういうことでやっていく。今も、家内は恵子を出席させるために自分は子守をしたりとか、裕美を出席させるために孫の世話をするとか、そういうことを実に細々と気配りして、そうやってとにかく集会へ



行こうと。

願うこと、祈って願うことは必ず成就します。御意にならぬ祈ることは必ず成就します。御意にならぬ祈ることは必ず成就します。成就するということがかわかっておれば、

「祈りたることは既に得たりとせよ」

と、キリストは約束してくださったんです。人間の世界は、得てからしか安心しない。キリストの方は、もう御言をいただきましたと。絶対に空手形ではないんです。それを実現してください。そういうお方がキリストさまです。

● 神の奥義なるキリスト

今朝は、私は希望のお話をしましたが、そこで一つ落としていました。コロサイ書の御言です。コロサイ書1章27節。パウロという方は非常に幅の広い方です。深く広く高く、そういう素晴らしい方ですけども、そのパウロのコロサイ書1章24節から読んでみましょう。

「²⁴われ今なんじらの為に受くる苦難を喜び、又キリストの体^{からだ}なる教会のため
に我が身をもてキリストの患難の欠けたるを補う」（コロサイ1・24）

コロサイにある聖徒たちに送っている手紙ですけども。フランシスコ会訳では、

「わたしは、今、あなたがたのためにこれらの苦しみを受けていることを喜んで
います。キリストの苦しみの欠けているところを、キリストの「体」のた
めに、この身で補うのです。」

この「キリストの苦しみの欠けているところ」というのは、私は、キリストご自身の苦しみがまだ足りないところがあった、というふうに理解していたけれども、このフランシスコ会の註におきましては、そうではないと。

「キリストのくるしみの欠けているところ」とは、われわれをあがなうために受けられたキリストの肉体的苦しみが不十分であったというのではない。なぜならあがないの苦しみは、キリストが十字架上で死なれた時点で完結したからである。キリストの苦しみの欠けているところは、キリストの神秘体、すなわち教会のメンバーの苦しみがまだ不十分であるということなのである。苦しみを受けることは常にこの世に住むキリスト者の宿命であろう。実にこのような苦しみを経て、キリストの体である教会は「成熟した背丈いっぱいになる」のである。パウロは福音を宣べ伝える者として、自分が受けている人並み以上の苦しみをもってキリストの「体」である「教会」のメンバーであるコロサイの人々のためにその必要を満たすのである」

そんなふう書いてます。私はこの機会に、私は訂正しておきたいと思えます。我々、キリストの御体を形作る我々の中でまだまだ苦しみが足りない。その足りない分を私はあな



た方の代わりに補っているんだよと。パウロは本当に言語に絶する苦しみを味わって下さいました。

「それは自分の中に死が働き、あなたの方の中に生命が働いたためである」

と、コリント書では言っています。そういうふうな意味あいなんです。それはそれとしまして、「キリストの「体」とは教会のことです。わたしは、この教会のために奉仕者となりました。あなたがたのために神がわたしに与えてくださった、神のことばをあまねく宣べ伝えるという任務に則してのことです。これは永遠の昔から、幾世代にわたって秘められてきた神秘です。

「奥義」というのは「神秘」と訳しています。ミステリオンですね。

——それが今や、聖なる人々に現わされました。神は、この神秘が異邦人のうちにどれほど豊かに輝き現われているかを、彼らにわからせようと思われたのです。この神秘とはあなたがたのうちにおられるキリストであり、栄光の希望です」（コロサイ1：24～27）

と訳している。普通の口語訳聖書、それから文語訳聖書では27節は、

「この奥義は、あなたがたのうちにいますキリストであり、栄光の望みである」

「この奥義は汝らの中に在すキリストにして栄光の望なり」

と訳している。要するに、キリストは私たちにとつての望みである。そして、そのお方が私たちの中に宿っていてくださる。これが実に奥義である。奥義なるキリスト。「奥義」というのは、パウロは二つの意味で使います。キリストこそは神の奥義である。「神の奥義なるキリスト」という、私は小さなパンフレットを前に出しました。「神の奥義なるキリスト」という言葉は2章に出てきます。

「²斯く苦心するのは、彼らが心慰められ、愛をもて相列り、^{つらな}全き悟りの凡ての富を得て、神の奥義なるキリストを知らん為なり。キリストには智慧と知識との凡ての宝蔵^{かく}れあり」（コロサイ2：2～3）

と、こういうことを言っています。神さまのミステリオン、神さまの奥義であり給うキリストという、そういう使い方と、もう一つ使っていますのはこの第1章で言っています、この「奥義」です。

これは今まで世々隠されてきた。それが今、終わりの世に現れた。一体、奥義とは何？それは実に、異邦人である我々にこの神の奥義でありたもうキリストが実に宿ってくださるということであり、それはまた私たちとつての栄光の望みである。キリストご自身が栄光の望みでもありますし、そのキリストがわがうちに宿ってくださるということが奥義であり、また私たちの輝ける望みであると。



● 田毎の月

だから、素晴らしいことなんです。大自然よりもかいキリストさまが、このちつばけな私たち一人ひとりの中にお宿りくださるという。宝物なんです。キリストさまという宝物が私たちの中に宿ってください。

女性の方だったら、首飾りとか、何々カラットの何とかのダイヤだとか、いろいろ聞くんですよ。私は全くそういうものに興味はないけれども。「それは男だもの」ということかも知れませんが。そういう宝物を皆さんは非常に大事になさる。しかしながら、その宝は単なるシンボルです。宝の実体は何か？「あなた方の中に宿り給うキリスト」であって、これに勝る宝はない。第一、誰も奪うことができない。掴つかもうとしたって、つかめるものではない。しかし、現然としてあなた方一人ひとりの中に宿っていてくださっている。キリストをお宿とする。私たち一人ひとりがキリストというお方をお迎えするお宿なんですよ。

「そんなことがあるの？」

「それが目的で私は地上に下りてきたんじゃないの」

と。キリストのみ思いですよ。地上におりてきてホームレスだったら、キリストは可哀相ですよ。ホームレスにしちゃったら、キリストはどこに宿ろうかと思つても、みなフンと無視したら、これほど寂しいことはない。それが、どこへ行つても、

「ああ、主さま。よくお出でくださいました。私の中にお宿りください」

と。一人の中に宿ったら、もうキリストはそれでお終いかというと、そうではない。霊なるキリストはどなたの中にも宿れるんです。

小池先生は、「田毎たごの月」というお話をなされたことがあります。田圃たんぼに水が張ってますね、お月さまが映っている。どの田圃を見ても、みなお月さまが映っている。たった一つのお月さんなのに、どの田圃にもお月さんが映っている。キリストが私たちの中に宿り給うというのはそういうことなんです。お月さんはたった一つでも、田圃の一つ一つ——田圃でなくてバケツにだって映りますよ——どこにだって、大きな器、小さな器、どれにも完全なお月さまがちゃんと映っていらっしやる。「あつ、これだ」と言つて、先生は気付かれました。

だから、私たちはそういうお月さんであるキリスト、光り輝き給うキリストを宿す。そういう、それぞれが田圃になりますように。キリストはどのお方にもちゃんと宿つて、光を放ってください。あなた方の中に宿り給う光です。これが私たちの栄光の望みでもあります。ですから、「確かなる希望」と言ったのは、その確かさはキリストの側にあるから確かなんです。我々が作りだした願いとか願望なら、これは消えるかもしれない。けれども、キリストのみ思いですから、これは揺るがないんです。本当に錨を下ろして動かない。それに望みを置いている私たちは絶対に揺るがない。この不安定な世の中にあつて、絶対に揺るがないなんていうものは、これは得ようとしたって得られないことです。どこの保険



会社が約束してくれますか。保険会社も潰れかかっているではありませんか、時には。まあ、それがこの世の常です、俗っぽいことを言つてすみませんが。

やはり、私たちの希望は天との関わりにおいてです。

「尽きぬ宝を天に蓄えよ」

とキリストはおっしゃった。この世で宝を持っていますと、

「ドロボーに入られないだろうか、強盗に襲われないだろうか。銀行に預けたら利息はちつともつかない。ペイオフでもう返つてこないかもわからない。地中に埋めてもやつぱり心配だ」

とか、思い煩いは絶えないですね。宝くじなんか当たったらダメですよ。3億円とか、5億円とか、宝くじがあるでしょ。当たつてうれしいのはその時だけです。あとはもう、じゃんじゃん電話がかかつてきて、

「あんた、当たつたんでしょ。ちよつとくださいよ」

と、ぞろぞろ現れてくるそうですよ。夜逃げしないと、どうにもならないそうです（笑）。だから、持たざる者は幸いなりという。持つならば、天に宝を積みなさいと。それは汲めども尽きない。いくらでも溢れて溢れて、人を豊かに潤していく。こういうものが私たちのいただいている確かなる希望ですから。そのことをちよつと朝の続きとして補つておきたいと思つた次第です。

●真理の御霊

そして、今日の祈り会の方です。今日は、「御霊の祈り」と題しました。御言としましては、ローマ書8章を開いてください。ローマ書8章というのは全ローマ書の中で一番のピークです。もうここにパウロの訴えたいところが結晶していると言つていいくらいです。もちろん、9章以下はユダヤ人のための祈りが3章にわたつて出てきます、9章、10章、11章に。それからまた、12章からは教会生活のいろんな細々としたパウロの行き届いた配慮が出てきます。一応、神さまの前に我々がどのようにして義とされるのか。神さまは何を求められておられるのか。そういつたことがずつと書かれているのが、1章から始まりましてこの8章で終わります。この8章がそのピークなんです。

しかも、8章というのは三つの部分に分かれています。第1節から第17節まで、それから18節から25節まで、それから26節から終わりまでの三つに分かれています。始めの部分は十字架中心です。霊と肉ということ。十字架がどんなに素晴らしいかということをやっています。そして、18節からは、今朝お話しました「希望」のことが出てきます。私たちの救いは今、始まった。そして、完成を待っている。この体が完全に贖われて、これでもつて完結する。今それが始まったばかりだと。しかし、始まったばかりだから不完全かというところじゃない。完全な質をもつて始まっている。これが満月になる時がくる。これが望み



なんですね。確かなる希望です。そして、この26節からは、祈り。御霊の祈りです。そして、キリストの愛。これが出てきます。まず、前半は祈りのことですね。26節、

「²⁶斯くのごとく御霊も我らの弱を助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き嘆きをもて執成し給う」

この「嘆き」は、「呻き」と言った方がいい。「斯くのごとく」は、この「我らは」以下を指していると思えます。今までのところを指しているというよりもむしろ、「以下に述べられるように」ということ。即ち、私たちはどのように祈ってよいかわからない。でも、御霊ご自身が私たちのために呻いて執り成して祈ってくださいている。そのように、御霊は私たちの弱さを、弱い私たちを助けてくださる。こういうお方であると。「御霊」はヨハネ伝におきましては、「助け主」「慰め主」とよばれている。これはキリストのお言葉ですよ。

「私が天界に行ったら、やがて助け主を送る。私が天界に行くまでは、それは来ない。贖い業を終えるまでは、どんなに自分が願っても、それは成就しない。

私が行けば、必ず助け主を父は送ってください」

そういう約束をヨハネ伝14章からなさっている。

ですから、ちよつと14章以下を開いていこうと思います。

「¹『なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ』

という、そこから始まります。本当に慰め深いところですよ。そして、16節、

「¹⁶われ父に請わん、

キリストがお願いをしてくださる。

父は他に助主をあたえて、

これはキリストは今、肉体を持っていらつしやるキリストですから、自分と別人格として表しておられます。ところが、現実には、天界に行かれたキリストが——いつも私は言いますように、ご自分の分身なんです——自分の霊を分かち与えて、そして、我々の中に内住せしめてくださる。だから、それはもうキリストの霊そのものなんです。けれども、肉体をもつていらつしやる時には、「助け主」——自分とは別人格の、そして、父が遣わし給う助主——その方を遣わしてくださいるように私はお願いしよう。そういうふうには我々の側に立つてお話ししてくださいます。だから、

¹⁶われ父に請わん、父は他に助主をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。

永遠に私たちと一緒に居らしてください。そのお方を私が天に行けば、父は下してください。今そのことをお願いしよう。父は助主を与えて永遠にあなた方と一緒に居らしめてくださる。そういうお方である。

¹⁷これは真理の御霊なり」（ヨハネ14・16～17）

この「真理の御霊」というのはありがたいですよ。天界の真理をことごとく我々に明らか



にしてください。

さつき、「鯛の頭がどうのこうの」というお話がありました。ああいう訳がわからなくて、ただ無理やりがむしゃらに信ずるなんていう世界ではありません。私たちが導かれているのは真理の中の真理、本ものです。神さまは本ものの世界にいらつしやる、本ものなるお方です。真理というのは必ず成就する何ものかなんです。必ず成就していく。冷たい哲学の理論ではない。生き物なんです。真理というのは。キリストご自身、このお方だと言ってもいいくらい、そういう真理の御霊です。私たちに神さまのことに關していろんなことを時に応じて教えてくださる。

それから、時には、偽りの霊と本当のキリストの霊を見分ける、そういう役割も果たしてください。さまたまな霊がいますからね。さまざま霊的現象がありますよ。その現象に惑わされてはいけません。小池先生はいつも、

「十字架の前に平伏していなさい。十字架を通って流れてくる霊は聖き霊、キリストの霊だ。十字架を通らないで、どこからかやってくる霊は、これには気をつけなさいよ。天使の姿をした悪霊かもしれない」

と。傲慢の霊、そんな霊がとりつきますと、これは大変です。いろんな奇蹟が起こるかも知れません。けれども、必ずその起こしている人間は傲慢になる。実に「自分は教祖だ、自分は神だ」と、そんなことを言います。ですから、小池先生は

「どこまでも、十字架の前に平伏していなさい。十字架の前につぶれていなさい。恵まれれば恵まれるほど平伏して行きなさい」

ということ、口を酸っぱくして言われた。「ワッショイ、ワッショイ」の祈りではない。本当に十字架の前につぶれた、そこに降ってきてくださる聖き霊、へりくだりの霊。そして神さまに、キリストにだけ栄光を帰する、そういう霊。これが本当の霊だと言う。ヨハネの手紙にもそのことが出てます。

「イエス・キリストを告白する霊は神から来た霊である。イエス・キリストが肉体をとって来られたということを告白しない霊は、これは偽りの霊である。それによって、あなた方はまことの霊であるか、偽りの霊であるかをハッキリ見分けなさい」

と。霊の世界というのは本当におそろしい世界なんです。私たちは、ありがたいことに、そういう霊界のことが見えないうようにしていただいているんですよ。もし、私たちが霊界のことが見え、先々のことが見えたら、そのおそろしい光景にもう萎縮してしまうかもしれない。ですから、皆さん、私たちに必要なことが必要な時に開示されるだけであって、そういう霊界のことを無理に覗きこもうとか、そういうことは思われない方がいい。従順に御言に従っていくということ、これが大事なんです。



●上からのお墨付き

昭和51年に大阪召団が発足しました。その年の暮にU兄弟が私の所へ、

「先生、いろいろお世話になりました」

と言って、お礼かたがたおいでになった。その晩、彼を通して本当に素晴らしい預言が与えられたんです。彼自身に、そして私に、その時に彼を通して私に語られたのは、ある高次な霊のお方なんです。彼に直接語ったのはパウロです。ハッキリ、パウロの霊というふうに、異言というかそういう預言を彼が解いてくれた。私の後ろに凄く高次な霊のお方が立っている時、その方が私に語りかけたくてしようがないのに、私は知らん顔をしている。鈍感ですから。だから、彼が代わりに取り次いでくれた。私は、そのお方はヨハネさんではないかなと勝手に思っているけれども。

私はその時、不安だったんです。私は祈りも足りない。何の霊的現象もない。異言も出ない。普通の人も何も変わったことがない。それで、集会のリーダーとして立っているわけでしょう。非常に不安なんです。ね、「これでいいんだろうか」と。U兄弟は、ウワァーッと祈ったら、ウワァーッと異言が流れ、預言が流れ、これは凄い。お筆書きみたいに、もう凄い御言が集中的に表れたりしましたから。これは小池先生も非常に驚かれたぐらい、彼は非常に霊の世界に敏感な方で、またいろんなものを受けとられた方だった。それと正反対に、私には何もそれが感じられない、わからない。ただただ、誠実にキリストにお仕えして、キリストを伝えようという、その人間的な誠意はひと一倍あるけれども、自分が本当にキリストに立てられているのか、キリストが用いようとなさっているのか、その確証が得られないということに悩んでいた。そして、彼を通して私に語られたのは、

「この人はキリストに立派に従っている。よく御言を聞いている。従順に従っていいこと、そういう言葉だったんです。」

「異言がなくても、預言がなくても、そういった諸々の現象的なものがなくてもいい。御言を御言として素直に受けとって、それに従っていく。これが御声が聞こえているということですよ」

と。それからもう一つ言われた。

「この人は忙しくて、時間がなくて、深く祈れないで苦しんでいる」

と。ちょうど、2年後の昭和53年にドイツへ行くことになっていた。まる1年後ですね。だから、

「ドイツへ行ったら、祈ってきなさい。研究はそこそこのいい加減でいい。研究に埋没したら、元も子もなくなる。この人は日本では残念ながら祈れない。ドイツで深く祈ってきなさい。そして、本当に十字架がその時にきつと開けてくるでしょう。」

聖霊を受けるでしょう」



という、そういう預言を彼を通して、私はいただいたんです。そういう、初めての霊的な体験——私が体験したのではない。別人が体験して伝えてくれただけなんですけれども——そういうことがあった。それから確かに私は変わったというふうには、兄弟姉妹たちは言うようになりました。奥田先生は何かが変わった。今までのようにおどおどしているところがなくなったと。それはやつぱり、上からのお墨付きというのはありがたいですよ。「これが見えないか」と言いたいくらいにね。そういうお墨付きのようなものをU兄弟を通して、私の困っている時、悩んでいる時に与えられた。そのことが即ち、

「御霊言いがたき呻きをもて執り成し給う」

ということなんだろうなと思います。

●キリストの分身

ヨハネ伝に戻ります。14章16節、

「¹⁶われ父に請わん、父は他に助主をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。¹⁷これは真理の御霊なり、世はこれを受くること能わず、これを見ず、

また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。」

私は父にお願いしよう。父は助け主を与えて、永遠にあなた方と一緒におらしめてくださる。これは真理の御霊です。世間はこれを受けることができない。また、これを見ない。また、知らない。あなた方はこれを知ることになる。まだこの時点では知りません。でも、あなた方は必ずこの方を知るようになる。このお方はあなた方と一緒におり——一緒にいるというのは、そばにいてくださる、伴侶ですね、一緒にいてくださる——のみならず、あなた方の中にいてくださるお方だからであると書いてある。ちゃんと、「中に居給うべければなり」と書いてます。

¹⁸我なんじらを遺して孤児とはせず、汝らに来るなり。

私はあなた方を遺して孤児とはしない。あなた方のところに行ってやる。これは実は、聖霊という姿でやって来てくださるんです。

¹⁹暫くせば世は復われを見ず、されど汝らは我を見る、

しばらくすると、世の人は私を見なくなる。キリストは天へ行ってしまうから。しかしながら、あなた方は私を見るんだよ。あなた方に出会うんだよ。見事に出会ってくださいました。ご復活なさって、そして、弟子たちがこうやって集まっている所にスーッと現れたり、その他、いくたびか弟子たちに姿を現された。そして、ペンテコステの時に徹底的に内住してくださいました。そういうお方です。

われ活くれば汝らも活くべければなり。

私が生きているので、あなた方が生きているのである。この「べければなり」とか、「べし」とか非



常に強い言葉が使っている。「必ず、絶対にそうなるよ」と。これから起こることですけれども、必ずそうなるよという約束をここで遺していかれた。

20 その日には、我わが父に居り、なんじら我に居り、われ汝らに居ることを
汝ら知らん」（ヨハネ14・16～20）

その日には、私が私の父の中に居り、そして、あなた方が私の中に居り、私がある方に居るといふ、この三者関係が、ピッタリ三者一体的な関係がそこで成就する。そういうことがあなた方はわかるようになるよ。

それから、少しとばしまして、25節、

「25 此等のことは我なんじらと偕にありて語りしが、²⁶ 助主、即ちわが名によりて父の遣したもう聖霊は、汝らに万の事をおしえ、又すべて我が汝らに言
いしことを思い出さしむべし」（ヨハネ14・25～26）

弟子たちは、確かに3年間、キリストと一緒にいて、いろんなことを聞きました。けれども、それは、ある意味においては、上の空だった。内住しないんです。耳では聞いたけれども、体に入っていない。では、どこかへ消えてしまったの？ そうじゃない。聖霊がやってきた時に、

「ああ、あの時におっしゃったことはこういうことだ。あの時こんなこともおっしゃったな」

ということが、まるでビデオの再現のように全部、浮かび上がってきた。それを一生懸命に書き止めて福音書が出来た。私はそう思っている。人間の記憶でたどって書いたのではなくて、聖霊が呼び覚まされた。そして、一遍身体の中にインプットされたものが本当に甦ってきた。だから、生き生きと福音書は書かれているんです。しかも、キリストが天界へ行かれてから、何十年もたつてから書かれたものです。これは早くて紀元70年とか、ヨハネ伝は紀元100年とか。そういうふうには、あとなんです。キリストは紀元30何年でしょ。だから、その間かなり時代的にずれがあるけれども、それにもかかわらず、今、目の前にキリストがおられるように生き生きと語られています。これは全く聖霊のなせる業だと、私はそう思うほかない。確かに、材料はころがついていたかもしれませんが。キリストの言葉を書きとめた文書とか、そういうものがあつて、それが編集されたりしたのかもしれない。そういう編集過程がどうであれ、とにかく、その一番母体になるこの福音書を書いた弟子たちというのは本当に聖霊に導かれて、

「ああ、あの時はこうだった。この時はああだった。あの時、こんなふうには手を置いて祈られた」

というのが本当に立体的に生き返ってきて、それがこういう文章になつたと、私は素直にそう思っています。だから、ヨハネ伝の今読みましたところは、やっぱり本当に生き生きしてありますもの。こういう助け主、これがローマ書でパウロさんが言っているこの「御霊」



です。この御霊が私たちの弱さを知っていてくださる。

「²⁶斯く御霊も我らの弱を助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き呻きをもて執成し給う。²⁷また人の心を極めたもう者は

神さまの方ですね。

御霊の念をも知りたもう」（ロマ8・26～27）

不思議ですね。神さまも霊なんですよ。

「神は霊なれば、拝する者も霊と真をもて拝せよ」

とキリストは言ってくださった。あの山でもこの宮でもどこでもない。神さまは至るところで祈ることができる。拝むことができる。至るところこれ宮なりと。今では実に、我々一人ひとりが宮ですし、こうして集まっているところが宮です。

「人生至るところ青山あり」

という言葉がありますね。都も田舎もないよと。その居るところ、居るところが本当にあなたの青山である。働き場所である。神さまは至るところにいてくださる。

神さまは霊です。キリストも今や霊。霊なるキリスト。そして、御霊も霊。三つも霊がある。どうなっているの？ というのが「三位一体」とか何とか、いろいろ智慧をしぼっておっしゃっているけれども。ナザレのイエスキさま、天にいます父なる神さま、それから聖霊というお方。このお方が三位一体だと言うけれども。本質的にはみなさん霊でいらっしやるわけです。霊なる、根源霊である父なる神さま、その方と常に共にありたもうた霊なるイエスキさま、キリストさま。そのお方が地上にイエスという姿でお宿りになった。正に神秘です。そのお方が贖いの業を終えて、そして、天界へ上られた。神の御座にいましたもう羔キリスト。そして、その分身として、我々の中にお宿りくださる霊なるキリスト、これが御霊のキリストです。だから、御霊のキリスト——私はキリストの分身、キリストの分身、そう申し上げたと思います——そのお方が我々一人ひとりを宿とし、宮として、そこに宿りたもう。その聖霊なる御霊のキリストが、天界にいるキリストに執り成して祈ってくださいっている。

●あなたは私と一緒に死んだ

それはそうでしょうね、御霊が宿ってくださいって——私は御霊となって、S君に入って言いましたよ、関西弁でね、

「このS君というやつが、私は好きでんねん。お父ちゃん、何とかしてやってね」

と。そうすると、天界のお方が、「極め尽くしてくださいるお方」と書いてますから、

「わかった、わかった。あいつはどうしようもないやつだけれども、かわいいてしようがない。お前の気持ちはようわかる。お前に免じて、S君を救おう、面倒を



みよう。お前も助けてやってくれ」
と、御霊のキリストにおっしゃる。

よく皆さん、通信なさってますね、「はい、了解」「はい、どうぞ」とかやってます。そうやって、御霊のキリストが一人ひとりの中にお宿りくださって、そして、天とつながって執り成して、私たちが知らなくても、

「御霊言いがたき呻きをもて執り成してありたもう」

という。愛の霊、執り成しの霊です。ご自分のためには何も求められない。キリストご自身がそうでした。聖霊はご自身のために何も求められない。そして、攻めてくる者に対しては防衛線となって、弁慶のように飛んでくる矢は全部消してくださる。ローマ書8章に出できますよ。誰が神の子を訴えるのか。キリスト・イエスは甦って、そして彼らのために執り成してくださると。次の31節以降に出てくる。

「³¹然れば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。³²己の御子を惜まずして我ら衆のために付し給いし者は、な^{すべて}どか之にそえて万物を我らに賜わざらんや。³³誰か神の選^{選ば}び給える者を訴えん、神は之を義とし給う。

受け入れてくださっている。

³⁴誰か之を罪に定めん、死にて甦えり給いしキリスト・イエスは神の右に在^{いま}して、我らの為に執成し給うなり」（ロマ8・31～34）

と。神の右に在す天界のキリストも我々のために執り成してくださっている。そして、地界に下りてきて、私たちの中に宿り給う御霊のキリストもまた天界のキリストに向かつて執り成しの祈りをしてくださっている。そういう祈りがめぐりめぐって、私たちは現在あるんです。救われてある。だから、救いの確かさというのは我々の中にはない。我々の立派さでもなければ、熱心でもなければ、信心でもない。それはきつかけではありましよう。

「あいつはあれだけ熱心に祈っているんだから、助けてやろうじゃないか」

と思っただけかも知れないけれども。結局は、御霊の執り成し、キリストの贖い、これは全部、神さまから出たことなんです。神さまから出たことは絶対、揺るがない。これは確実です、消えないんです。

だから、ありがたいですよ。私たちのマイナスは全部消してくださった。私たちに一生消えないトラウマというものがみんなあるんですよ。本当に、どれだけそのトラウマというもので苦しんでいるか。しかし、キリストは「それはもう消したよ」とおっしゃってくださる。

「トラウマを消したよ。私は十字架でもう全部消したよ」

「いえ、でも残っているんです」

「それは幻だよ。もはや、あなたの中でそれは仮のものだ。本ものあなたの中に



はトラウマはない。あなたは新しく生まれただから。新しく生まれたあなたにはトラウマなんかはもうないんだよ」

と。いろんな、うなされるような傷が積み重なって、本当に精神的に傷ついてしまったとうにもならない。薬で治すと言いますけれども、薬は麻痺させるだけです。神経を麻痺させ、時には精神をこわしてしまいます。だから、できることなら、早く薬から解放された方がいいと私は思っています。それでも本当に解決してくださる方はイエス・キリストです。そのお方は私たちのいかなる苦しみも全部ご存知なんです。ことごとく知りたもうて、それを背負って、

「お前のために私は死んだよ。十字架で死んだよ。あなたの死も一緒に背負った。だからもう、あなたはこれから死ぬことはない。二度死ぬことはないんだよ。一度あそこで決定的に私と一緒にもう、死んだんだから」

と。それは神さまの世界での出来事はそうなんです。地上では、私たちは死んではいません。けれども、神さまの世界ではもう死んでしまった。キリストが私たちを抱きかかえて一緒に十字架で死んでくださったんです。

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず」

というパウロの告白。これは美しい詩の表現ではない。ポエム（詩）ではないんです。現実なんです。霊的現実をパウロさんはあのようにして告白してくれた。今、肉体に在って私が生きているのは、この私のために生命を献げてくださったこのイエス・キリスト、そのお方を信じて、そのお方と一つになって、すがって、そして、そのお方と一緒に生きている。そのお方が私と一緒に生きてくださっている。だから、もう古い私はいないんだと。私はもう本当に解放された。罪からも、病いからも、呪いからも、すべてから解放されてしまった。イエス・キリストの十字架はそれだけの力をもっているんです。ただ一回切りの、あの歴史上に現れた十字架が、神さまの世界では永遠の質をもって今も生き生きと我々の中に働いてくるんです。

呪文を称えるのではないんですよ。霊の根源現実、永遠に消えない本当の永遠なるもの、これが今も現在となつて、「現在」「今」となつて、我々に迫ってくる。そして、救い上げる力を持っている。この十字架の力の凄さ、これを本当に味わっていたいただきたい。それも、示してくださるのが聖霊なんです、これまた。人間の理性ではこれはわからない。わかるうとしたって無理なんです。御霊がキリストのあらゆる御業を我々に解きあかして、なるほどと納得させてくださる。

●キリストと共同の相続人

人は「信仰」と言いますが、私には「現実」だと思っています。この私たちの生きてますその霊の世界のことは、これは非常にナチュラルなんです。霊の世界からみたらナチュラル



ラル、この世間の世界からみたらアンナチュラルです。まるで水と油。けれども、その世界に入ってみたら、実に合理的でありまして、実に理にかなっておりまして、真理の世界ですよ。何一つ不合理なことはないんです。まことに「ザッツ ナチュラル」という世界です。その「ザッツ ナチュラル」という神さまの世界が、人間どもの世界からみたら、実に摩訶不思議に映ったり、非合理に映ったり、不合理に映ったり、そういうことで、衝突するんですけども。

でも、神さまの方に軸足をすえてごらん。今まで地上に軸足を置いていた。これが、天上に軸足を置いて——ぶらさがるかもしれませんが——そこから地上を見下ろしてごらんさい。

「ははあ、なるほど。なるほど、こういうことなんだね」

ということになる。地界から向こうを見てたんです、我々は。今度は、自分が天界に昇らされた思いで地界を見下ろす。宇宙飛行士はみなそれをやってきたんですよ。宇宙から地球を見た。なんと地球はいとおしいか。青くて丸くて美しい地球は、いとおしいという。

軸足を変えますと、視点を変えますと、今まで見えなかったことが見えてくる。私たちはこの地上にいながら、人間でありながら、しかし、いつしか人間を超えた神さまの世界の目をいただいて、その理解をいただいて、その霊の理解でもって神さまの世界を、のみならず地上の世界をもいつしか見るようになってしまった。そうすると、地上で今まで輝いていたように見えたのが、「なんだ、それだけのことなのか」と。いろいろうらやましいと思つてたのが、何だそれだけのことなのかと。人をうらやむことも何もない。人がいろいろ寄つてたかつて意地悪したって、

「気の毒な人たちだよ、この世のことしか見えないんだから。私はもうそこを突き

抜けた世界にいますから、痛くもかゆくもない。あなたはお気の毒ですよね」

と、こつちが同情するように、そういうところへキリストはずっと引き上げてくださる。だから、この福音の世界に生きるということは本当に、この地上にありながら地上人ではなくなる。天国人になってしまう。天国と地上が、働く原理が違っております。だから、時には私たちは二重国籍で苦しむんですよ。

「何とか一重国籍にしていただけませんか」

と。ということとは

「早くお召しくください」

ということなんです。それでも、

「いやいや、お前は今地上でやるべき仕事がある。それが終わるまでは、簡単には

呼びはしない」

と。そういうことの板挟みで、パウロさんも苦勞もしました。

私たちはみんなそのようにして、キリストがあのような苦しみを受けて、私たちに生命



を賜うた。今度は、私たちもキリストと同族ですから、キリストだけに苦しみを味わっていただくのではなくて、私たちも、かけらは味わわせていただきましょうと、苦難も共にする。栄光も共にする。これが本当の肉親ということ。霊の兄弟姉妹ということ。苦しみも喜びも全てを共に味わう。

そういうことがまた、パウロのこの手紙にも出てくる。もう一度戻っていただきますと、さきほどの少し前のところ、ローマ書8章14節から、

「¹⁴すべて神の御霊に導かるる者は、これ神の子なり。

神の御霊に導かれていたる者は神の子である。ということとは、神の霊をいただいて、うちに神の御霊が宿つてくださる。そしてまた、私たちのそばに一緒にいて、執り成してくださる。中にも外にもいてくださる。「そんなことあるの？」と。空気だつてそうですよ。空気は私たちの中にも入ってきます。外で包んでくれます。包みつつ中に宿りつつ、私たちを持ちあげてくださる。そういう神の御霊に導かれていたる者はこれ神の子なりと。

¹⁵汝らは再び懼を懐くために僕たる霊を受けしにあらず、子とせられたる者の霊を受けたり、之によりて我らはアバ父よと呼ぶなり。

あなた方は再び懼れをいなく、びくびくする、そんな霊ではない。これは奴隷の霊なんです。奴隷はびくびく、びくびくしている。そういう霊ではない。子どもの霊をいただいた。子どもは、「お父ちゃん、お母ちゃん」と親しげに呼ぶ。そういう霊をいただいた。その霊でもって「お父さん」と呼ぶ。「主さま」と呼ぶ。「イエスさま」と呼ぶ。そして、

¹⁶御霊みずから我らの霊とともに我らが神の子たることを証す。

御霊ご自身みずから私たちの自分の霊と一緒に——私たちは霊的存在です。一人ひとりが霊的人格です。その霊がある。その霊と、内住したもうたキリストの霊とが本当に一つになってしまつて——この御霊みずから我らの霊とともに私たちが神の子であるということを確認してくださる。人から言われたのではない。本当に内的な確信が湧いてくる。そういうふうな子どもであつて、そしたら、神さまの御国を受け継ぐ世嗣ではないかと。

¹⁷もし子ならば世嗣たらん、神の嗣子にしてキリストと共に世嗣たるなり。

神の世嗣であつて、キリストと共に世嗣である。キリストは私たちの救い主でありたもうとともに、兄弟というレベルでは長男でいてくださる。キリストは私たちのことを「兄弟よ」と呼んでくださる。だから、キリストと共に共同の相続人である。

これはキリストとともに栄光を受けん為に、その苦難をも共に受くるに因る」
(ロマ8・14～17)

栄光も苦しみも一緒。私はいいいところ取りだけして、嫌なものは全部、キリストに背負わす。これは、過去の自分はそうだったかもしれない。でも、今はそうではない。「主さま、あなたと一緒に苦しみも、喜びも——「喜びも悲しみも幾歳月」とかいふ灯台守の歌がありま



したね——そのように、喜びも苦しみも悲しみも希望も全部、キリストが一緒に我々と味わってください。そういう姿。

● 神の預知予定

そして、さきほどの続きですが、

「²⁶斯くのごとく御霊も我らの弱を助けたもう。我らは何かに祈るべきかを知らざれども、御霊みずから言い難き嘆きをもて執成し給う。²⁷また人の心を極めたもう者は御霊の念をも知りたもう。御霊は神の御意に^{かな}適いて聖徒のため^{とりな}に執成し給えはなり。

御霊は神の御意に適いて聖徒のために執成してください。人の心を極めたもう霊なる神さまは御霊の御思いを知ってください。そして、この御霊は、神さまの御意に適う、そういう執り成しをしてください。

²⁸神を愛する者、すなわち御旨によりて召されたる者の為には、凡てのこと相働きて益となるを我らは知る。

神を愛する者、すなわち御旨によりて召されたる者——私どもです。——そういう者の為には、凡てのことが相働きて、結局は善となる。プラスとなる。益となる。どんなにマイナスとみえることであつても、それは結局は全部、こやしになってプラスに変わつてしまう。これが神さまの世界なんです。サタンの世界は逆ですよ。どんなことをやってみても、全部マイナスにマイナスに働いてしまう。ところが、キリストの導いてくださった世界というものは、どんなに自分が失敗を重ねようとも、それは全部、キリストがつぐなつて、そしてプラスにひっくり返してください。そうすると、安心感が出てきます。「また失敗するんじゃないだろうか。まだ何かへまをやるんじゃないだろうか」と、ビクビクビクビクする。これは「奴隷の霊」ですよ。

それに対して、「子たる霊」というのは、赤ちゃんを見てごらん下さい。暴れまわって、障子は破るわ、襖は蹴飛ばすわ、テーブルの上のものはひっくり返すわ、いろんなことをやっていますけれども、ビクビクしません。お母ちゃんに叱られたつて、ケロッとしてます。ビクビクしません。いつも、「お母ちゃん」と言つて、懐に飛び込んでいく。これが子どもの姿ですね。泣きたいときは泣く。わめきたいときはわめく。うれしいときには、うれしいと言う。あるがまま、そういう幼子の姿。これがキリストの最も喜ばれる姿なんです。

キリストは、人間が大人ぶつて取り澄ましてというのは、お嫌いのようですね。ぶつちやけた姿が好きなんです。あるがまま、そのままをキリストにもつてくる。

「ちよつと、背広を着てから出直してきます」
なんて言うよ、

「そんなことはいいよ」



とキリストはおっしゃる。人さまの前ではやっぱり背広を着て出ないと、失礼にあたるでしょうけれども、キリストさまから見れば——心の姿がきちんとしつかりとして出ることは必要でしょうけれども——本当にあるがまま、どろんこのまま、そのまま、あるがままの姿でキリストに私たちは行く。いや、キリストが肩をたたいて、呼び起こしてください、そういうお方ですから。そういうキリストのありがたさを、ぜひ味わっていただきたいんです。

ですから、神を愛する者、キリストを愛する者、すなわち御旨によって召されたる者の為には、一切のことが相働きて、結局はプラスになってしまふ。悪魔がどんなにろんな誘惑をし、どんなにかき回しても、結局は最後は神さまの勝利に来てしまふ。それは御霊がついていてくださるから、大丈夫。そして、

29 神は予^{あらか}じめ知りたもう者を御子^{かたち}の像^{かたど}に象^{かたど}らせんと予^{あらか}じめ定め給えり。」（口

マ8・26～29）

と。神さまは、あらかじめ知っていてくださっている私たちを御子キリストのかたちにかたどらせようとあらかじめ決めてくださっている。生まれる前から、ちゃんと神さまの方ではご計画があつた。生まれる前から私たちがもう選んでくださっている。そして、時が満ちて、私たちは自覚的にキリストを、人格的に霊なるキリストを知るようになるんですけれども、その前から既にそうだったよと。

これを法律の方では「遡^{さかのぼ}及効^{きう}」といいます。遡^{さかのぼ}って効力をもつという。気付いたのは今だ。気付いてみたら、それは実に母の胎内にあるときからそうだったという、遡^{さかのぼ}る効力です。法律の世界で、騙^{だま}されましよう。気がつくまでは有効なんです。騙^{だま}されたことに気付いて、取消^{たしやう}といつて、始めに遡^{さかのぼ}つて、全部無効になる。これが取消の遡^{さかのぼ}及効^{きう}という。ありがたい制度ですね。今まで来たのが全部帳消しになって元に戻ってしまうという。

キリストの遡^{さかのぼ}及効^{きう}はありがたいんです。今、気付いた。何か、Kさんは50年間、キリストの門を通り過ぎて、知らなかったという。もう60も終わりのころにやっとキリストに出会いになった。それでも、キリストは

「お前の生まれる前から私はお前を知っていた。お前のことをじつと見つめていた。

よく気付いてくれた。過去のマイナス以上のことをこれからするからね。濃密な

晩年を与えるから」

とおっしゃってください。

● 神さまのお使い

マタイ伝20章に、働き人の話が出てくる。朝早くから労働市場へ行つて、働き人を捜している主人に出会つて、そこへ行つて働いてきた。遅れて来た人もまた行つた。最後は5時頃にやっと仕事にありついて働き場へ行つた。みんなに対して労賃を払う。夕方5時の



人に一デナリをあげる。一番早くから働いていた人は——約束は一デナリです。約束を変えて、自分にだつたら5倍位いただけれると思つていたら——やつぱり一デナリだつた。怒りだしたんです。

「私は朝早くから汗水流して働いた。この人は夕方の5時から1時間働いただけだ。

だのに、一デナリ、一デナリ。何たる不公平ですか」

と。それは労働法からいうと、不公平です。労働時間において賃金を払うというのがこの世の法則なんです。けれども、キリストはおっしゃった。

「一デナリの約束をしただろう。あなたはそれを納得しただろう。私はやつと5時

になつて仕事にありついたこの人にも同じように恵みを与えたいんだ。私の財産

から一デナリあげて、なんであなたが文句を言うの」

と言われたという話がマタイ伝20章にあります。天国は雇い主がその労働人に労賃を払う、そういうものが天国だとおっしゃった。だから、その5時からやつと働きたしたのはKさんかもしれない。けれども、等しき恵みをもつて一デナリ——「一」というのは完全を表す——その完全なるものを与える。これが父の御意なんです。ですから、若いときに気付いた人には素晴らしい祝福があります。確かに、朝から夕方まで働いて、激しい労働でクタクタかもしれない。しかし、そこに祝福がこもっているんです。

「働かされた。俺は貧乏くじを引いたな」

と思つたら、それは祝福にはなりません。神さまの懐で、神さまの畑で、神さまの力をいただいて、働かせていただいた。こんなありがたい人生はあるだろうか。本当に働いていたら、みんな満足を持っているんです。満足感を持っているんですよ。だから、それはそれで素晴らしい。それから、働き場にありつかなかつた方にも等しく恵みを与えよう。本当に人それぞれに応じて最善をなしてください。

「今までの自分の過去の人生は本当に傷ばかりだつた、マイナスばかりだつた。

私なんかは人と比べたら、本当にマイナスのマイナスの何乗にもなる。不公平だ、

つらい、自分は傷ついた」

と、そういう思いでいらつしやつた方々は本当に、イエスさまがその何十倍にして祝福にして返してください。マイナスの何乗分をプラスの何乗にして返してくださいから、これからの人生を楽しみになさってください。

ただし、一つだけ条件がある。イエス・キリストにべつたりくつつくこと。イエス・キ

リストがくつつくこうとしてくださるのを拒まないこと。イエスさまは優しいお方ですから、

「いやだ」

と言つたら、おいでにならないんです。

「そうか」

と、涙を流して去られるんです、悲しげに。「来てください」と言つたら、もう喜んで来て



くださる、そういうお方ですからね。

どこかの宗教みたいなのに、無理やりにどこかに連れ込んで、ギャンギャンやって洗脳して、そんな変な宗教ではありませんから。何よりも人格を尊んでくださいます。その人の自由を尊びたもう。そういうのがイエスキリストという霊的人格です。そのお方と濃密な関係になつてごらん下さい。これはもう、人生が変わりますから。濃密な関係——不適切な関係ではありませんよ——濃密ない関係ですからね。そうなれば、これはもうその人が本当に素晴らしく輝く。

そしたら、次にイエスキリストは何とおっしゃるか。

「あなたと同じ苦しみを味わっている人のところへ行つて、助けてあげなさい。同じ苦しみを味わった人にしか、それはわからない。だから、今度は、あなたが働く番ですよ」

と。そう言つて、遣つかわしたもう。神さまのお遣いとして使つていただくほどありがたいことはないですよ、この世の中で本当のところ。そういう方は天国へ行つたら、素晴らしく輝く人です。我々は天国で輝きましようよ。

ノーベル賞をもらえなくなつていいですよ。誰ももらえません、ここにいる人は（笑）。でも、我々は天にご褒美が備えられています。天のご褒美に向かつて、我々はひたむきに走る。それも御霊の力で走る。そういう旅路なんです。

「御霊、言いがたき呻きをもて執り成してください」

ということをしつかりといただいて、山をくだつていただきたいと思つている。

●キリストの姿を瞑想しながら祈る

それから、もう一つ、ヨハネ伝15章へいきます。さきほどの聖霊のことが出て来ていたところの続きです。その次の章です。

私は葡萄の樹だ。あなた方は枝だと。葡萄はふさふさと実を結びます。みんなその実の素晴らしさは見ているけれども。これは、根っこがあつて、葡萄の太い幹があつて、それから枝が伸びていて、そして、そこに葡萄の房がなるわけです。中を流れている樹液が葡萄となつて実るわけです。キリストは、

「私は本当の葡萄の樹だ。あなた方は枝だ」

と言われる。枝と樹とは切つても切れない関係です。もし、枝がポロツと落ちたら、台風で落つこちらなら、これは悲しいかな、実を結ばません。枝は葡萄の樹に、本体にしがみついていたなら、必ず実を結ばざるを得ない。そういうことをこの葡萄の樹の譬えでおっしゃつた。

「あなた方は私を離れたら、何もできない。私と一つであれば、どんなことだってできるようになる。私がしてみせるよ。だから、どんなことでも祈りな



「おつしやっている約束があるんです。これが15章7節です。」

「あなたが私の中におり、私の言葉があなたの中に宿っているなら、どんなことでも求めなさい。望みにしたがって求めなさい。そうすれば、必ず成ると。」

「汝もし我に居り、わが言なんじに居らば、何にても望に随いて求めよ、然らば成らん」

この「居る」というのは「宿る」ということです。一時滞在ではない。宿るというのは少し長期的な滞在です。だから、私は「宿る」とここに書きました。原文は「あなた方」と複数です、弟子たちがいますから。けれども、我々が読むときには、「あなた」と読んでください。自分自身に直々に語られている言葉として。だから、「汝」と書きました。

「あなたが私の中に居り、私の言葉があなたの中に留まっているなら、そうすれば、何でも望みどおりに求めてごらん。そしたら、必ず成るからね」

と。キリストの中で、キリストのみ思いに即して祈ることは必ず聞かれる。御霊が執り成し、御霊の執り成しの祈りに助けられて祈る。自分が祈っているつもりでも、実は御霊が祈らせてくださっているという、そういう祈り。これを味わっていきますと、本当に祈りが楽になります。大声を出す必要がなくなってきます。心の中で静かに

「主さま、本当にありがとうございます。もう、あなたのことを思えば、涙が出てきます。ありがとうございます。もう、祈る前から、あなたは私の必要をご存知です」

と。私の必要というのは、

「あの人を助けてください、この子たちを救ってください、こうしてください」と。自分のことはほとんど祈らないです。本当に、

「助けを求めている人たちを救いあげてください、助けてください、具体的な助けをください」

というふうに。翔ちゃんが時々、精神的に不安定になります。

「翔ちゃんをどうか助けてください。今、思春期で非常に不安定になっている。どうぞ、翔ちゃんを助けてください」

そのようにして、本当にキリストの中に私たちが宿り、キリストの御言が生き生きと私たちの中に留まってくたさるなら、そういう場で私たちが祈りますと、それは必ずきかれる。キリストが為してくたさる。祈ったことは必ず既に聞かれたと、そう信じていくことです。本気で祈ったら、キリストは本気で聞いてくださっている。本気で祈りますと、本気で聞いてくださっている。火花します。その時に、



「^{しか}然り、わかった」

と。そうしたら、ちゃんといいいようになさってください。あとは結果がどうなりましたって、そんなことは問題にしなくていい。毎日、毎日祈っていけばいい。それは、祈りが聞かれていないからまた重ねて祈るのではない。毎日、毎日が新しい祈りをしていく。祈りを通してキリストと本当に具体的に——「お付き合い」という言葉は変ですけれども——そういう関わりです。私たちは言葉をとおし、思いをとおし、そしてキリストさまと本当に密なる関係で結ばれて、そしてキリストから生命が流れてくる。私たちの祈りが流れていく。それを執り成してくださるのが聖霊です。だから、祈りを執り成してくださるのは御霊です。祈るときは、

「御霊の皆さま、ありがとうございます。私が祈るのではなくて、あなたさまが祈ってくださいっているんですね。いや、私ごとき人間が祈りたいなんて殊勝な心になるのは絶対、あなたの執り成しですよ」

と。そうなんです。この人間どもが殊勝な思いで、「祈ろう」なんていうのは、これは御霊の執り成しですから。「ああ、ありがとうございます」と。苦しい時の神頼みというのはなくて、本当に

「主さま、私は祈りたいから、祈ります」という祈り心で祈るといえるのは、これは素晴らしいことです。そういうときの祈りは必ず聞きとどけられています。そういう思いで祈ってください。

始め沈黙で、どうぞ主さまの前に、主さまを瞑想しながら祈ってください。「主さまを瞑想する」というのは、福音書で現れてくださる主さまのみ姿、それをご自分の好きなイエスさまのお姿を心の中に描いてください。

湖の上を渡ってきてくださるキリストでもいいですよ。ペテロのところへ行くのではない。自分のところへ来てくださるキリストですよ。海の上を歩きながら、

「お前のところへ行きたいんだよ。お前は苦しんでいるね。進むに進めず、退くに退けず、本当にSOSだね。私はやって来たよ」

と言って来てくださるキリスト。あるいは、五千人の人たちにパンを分かち与えておられるキリスト。あるいは、羊の群を牧^かつて優しく羊を抱いていらつしやるようなキリストでもいい。いろんな福音書の場面にキリストのお姿が描かれています。

十字架の上で祈っておられるキリストでもいいです。これがもつとも凄いキリストかもしれません。

「父よ彼らを赦してやってください。彼らは自分のしていることがわからないから。私は彼らのために生命を棄てます。どうぞ、彼らに生命を与えてやってください」

と、執り成して祈ってくださっているキリスト。そういうキリストのお姿を瞑想しながら、



「主さま、本当にありがとうございます。こんな自分をも、あなたは顧みていてくださる。本当なんです、本当なんです」

と。考えてみたら、不思議なことです。東洋の一角でこんな、一人びとりにキリストが直々にこの場に臨んで、一人びとりに手を置いて、

「私だよ、安心するんだよ」

と、一人ひとりの上に見えない手を置いてくださって、聖霊が祈って執り成してくださっている。これは実に不思議なことです。でも、現実です。本当に現実です。ありがとうございます。

主さま、ちょうどあの山の上であなたが変貌されて、ペテロ、ヨハネ、ヤコブが本当に肝を失った。

「これは現実でしょうか。不思議なことですね。小屋を二つ造りましょう」

とうわごとのように言った。そのような現実が今ここに起こりつつあります。

本当に、あなたがここに臨在くださっているんですね。あなたが一人びとりの上に霊の手を按いてくださっているんですね。あなたの霊の按手があれば、ビリビリッと来ますよ、本当に。火花します。主さま、ありがとうございます。こんな汚れた人間をも、あなたは聖いと言ってください。

「お前はもう罪がない。問題は全部片づいている」

と、あなたがおっしゃるのだから本当です。ありがとうございます。パウロさんが告白してくれたように、

「われ主と共に十字架せられたり。もはやわれ生くるにあらず、御霊のキリスト

トわがうちにありて生き給うなり」

と。本当にそれが現実なんです。ありがとうございます。これは神秘です、奥義です。わがうちに宿り給うキリスト、栄光の希望です。本当にありがとうございます。

そういう思いで、本当にキリストさまの御名を心の中で呼んで、しばらく沈黙して祈ります。

